

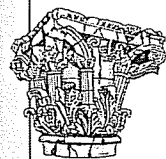
特集 西欧社会と仏教

Theme: Western Society and Buddhism

インタビュー

仏教思想の普遍性

中村 元——聞き手・菅野博史



——本日は編集部の依頼で、インタビューをさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

中村 どうぞよろしく。

——では、早速質問させていただきます。民族・国境の垣根を超えて、広く伝播したキリスト教、イスラム教、仏教などを世界宗教といい、また普遍宗教ともいいます。

これはたとえばユダヤ教、ヒンドゥー教、道教などの民族宗教に対するものですが、ユダヤ教は別かもしれませんが、宗教学者がいうところの民族宗教自身は、必ずしも一民族、一国家のなかにだけ限定されることを標榜しているわけではないと思われます。

したがって、キリスト教、イスラム教、仏教などが世界宗教と規定されるに至ったのは、歴史的事実として、民族・国境の垣根を超えて広く伝播したということがあったからであると思われます。

そこで、キリスト教、イスラム教、仏教などどのような点で普遍性をもっていたのかということが問題として立てられると思います。キリスト教、イスラム教はあとで何うとして、まず初めに仏教の普遍性についてお尋ねしたいと思います。

中村先生は、いわゆる六師外道などと並んで当時の



中村 元氏

正統派バラモン教に対して一異端にすぎなかった仏教が、世界宗教、普遍宗教と呼ばれるに至った条件、宗教としての普遍性の条件は何であったとお考えでしょう。ひとまずゴータマ・ブッダの思想に即してお答え願えればと思います。

普遍宗教としての仏教

中村 たしかに、いわれるように、民族宗教と呼ばれるものでもですね、その民族を越えて広がっている。ヒンドゥー教はインド人だけじゃないんでして、ネパール

ではヒンドゥー教が国教になっています。反対に、インドでは宗教は何でもいいことになっている。

それから、道教は中華民族の宗教ですが、しかし、日本にもかなりその影響があつて、道教の影響ということ、ことにこのごろ学者が盛んに取り出していますね。だから、民族宗教のなかにも、普遍的なものとなりうる可能性は秘めている。けれども、いわゆる世界宗教のほうに本当に普遍宗教として広まったわけですね。

仏教の場合について申しますと、最初は、今いわれませんでしたように、正統バラモンに対する異端説の一つにすぎなかった。いわゆる六師外道といわれている、それと並んで、当時興った、新しい思想であつたにすぎない。

ところが、それが非常に発展しまして、世界宗教となつたわけですが、そこにはやっぱり民族の差を超え、当然、階級制度をも超えてですね、人間性に訴えるものがあつたからだと思います。

だから、仏教はインド人に訴えたばかりじゃなくて、他の諸民族の人々が仏教の教えに触れると、それを信奉するようになったわけですね。その一例として、西のほう

からギリシャ人が入ってきました。で、ギリシャ人でもですね、ヒンドゥー教の感化を受けた人が知られております。そういう人がいたことが知られている。

けれども、彼らが大部分奉じたのは仏教です。従来のヒンドゥー教の観念によると、ギリシャ人、それからシナ人、シナ人をチーナと申しますが、これは、けがれた民族といわれるんですね。

インド人は食べ物を非常に大事にしまして、外国人を厨房に入れない。台所に入れない。もしも台所に入ると、食べ物がけがれるからと考えていた。この風習は今日なお残っております。

ギリシャ人とかシナ人というのは文化民族のほうですが、しかし、インド人からみると、ムレーチャ(Mulee Chas)と申しまして、夷狄なんですね。夷狄は野蛮人に通じます。ところが仏教は、夷狄とか野蛮人とか、外国人を差別することをしなかったんです。皆、温かく包容しようとした。だから異民族は入りやすかつたわけですね。

そういう傾向があるために商業路に沿つて広がりました、次に中央アジアのシルクロードの商業路に沿つて、

教えが中華民族に伝わる。更にそれが朝鮮、日本へと及んだわけですが、狭い偏狭な民族意識とか階級意識というものがなかった。じかに慈悲を説いて、人々の心に訴えるものがあつた。

まあ、これがアジア全体に仏教が広まる要因になつた主な理由ではないかと思ひます。

——普遍性の条件として、人間の平等観という点が最も重要だつたというお話ですね。

中村 そうですね。

——そのほかに、幾つかゴータマ・ブッダの思想に即してお伺いしたいんですけれども、たとえば宗教的理想に到達するべき方法として、中道の精神ということが重要だと思ひますが、これなども普遍性を獲得するうえで何か重要な役割を果たしたと思ひられますが、いかがなものでしょうか。

中村 そう思われますね。で仏教の古い詩の文句をみますとね、ガーターと申しますが、それを見ると、タパスを重んじているんですね。苦行ですね。タパスを決して排斥していない。修養の道としてタパスを説いています。

しかし、そのタパスの内容が当時のほかの宗教と違つていた。ことにジャイナ教なんかとはつきり違つてゐるわけですね。ご承知のように、ジャイナ教では身を苦しめる苦行を行っている。ところが仏教は、タパスを行へといつてゐるけれども、実際の問題として、それほどきつくはなかつた。そこで、ある時期から仏教は中道ということとを説くようになったわけですね。厳しい修行もしないし、そうかといつて快楽にもふけない。

この立場に対して、ジャイナ教のほうでは「仏教徒は墮落している」「怠けている」と、そういう批評をしたわけですね。

けれどもすべての人が苦行者になるわけにはいかないんでして、やっぱり宗教的な理想を現実に即して実現しようということになりますと、仏教のように偏らないで、

の世界において大きな意味をもつと思います。

ことに、これからの世界はだんだん一つになる。そうすると、違った宗教の人とか、違った信条をもっている人がお互いに顔を合わせ、時には協力する必要性が起きてくるわけですね。

その場合に、教義が邪魔になる。既に西アジアのほうでは、教義が違つたために戦争が起きてるんじゃないですか。ところが仏教の場合にはそういうことがないんですね。これは仏教の未来性をここに読み取ることができると思います。

——その形而上学的な問題に対する判断保留ということ、原始仏典では毒矢の譬えが説かれておりますけれども、ここでぜひ伺いたいのは、あの毒矢の譬えが説かれる場合は、仏教にまだ入っていない人がですね、入門する段階において説かれている。それでまえから疑問だったんですが、そのような初心者だけに對して形而上学的な問題は修行に無益ということ、判断保留されるのか、あるいは一貫してその立場が仏

ようか。

中村 これはおおいに付け加えることができたと思います。それだからこそ、大乘仏教は広まったんですね。

まず、原始仏教以来の立場というものは、哲人の宗教だったと思うんです。世の人は迷っている。けれども、自分は真理を悟った哲人として立派に生きていきたい、と。

ダンマパダのなかにもありますが、高樓の上から世の人々を見下ろすがごとく、あるいは高い山の頂の上から迷える人々を見下ろすがごとく、賢者はしっかりと心構えをもつ、と。そういう説き方です。これは優れたわずかの人には向くけれども、一般にはどうも適応しない。そこで、一般の人々の心情に適應するように、まず、仏様を超人化したわけですね。まあ、いわば神様の代理みたいにしたわけです。そうすると、人々の宗教心情を満たすことができる。それから、何がいかん、かにがい

かんといつて、伝統的・保守的な仏教では退ける傾向があった。

教の基本的な立場なのかということなんですけれども……。修行が進んでいきますと、そういう問題に関してもおのずと解決が得られると考えたのでしょうか。

中村 あの毒矢の譬えの原典を読みますとね、初心者に對しては迷いを起こさせるから説かないんだといううなことはいわれていないのです。どこまでも端的に真理として、形而上学的な対立の一方に与することはしないということをいつている。これがやはり究極の教えだったと思うんですよ。

ところが後代になりますとですね、密教のようなものが起きて、秘密の教えは釈尊が一般の修行者には伝えられなかったということというようになったわけですね。それは後代の立場でして、仏教の最初にはみられない思想だと思います。

——次にインド仏教の歴史的発展に視点を置いた場合、大乘仏教はそれ以前の原始仏教、部派仏教に對して普遍性の点で、何か付け加えることができたのでし

ところが大乘はですね、いかなる教えにもそれぞれ存在意義を認める。つまり、人々に對する温かい理解があったわけです。これは慈悲の精神と相即し、表・裏の關係になってると思います。この慈悲の精神はとくに、大乘で強調されたんです。だからこそ、アジア一般の人々に心から奉ぜられるようになったんだと思います。

利他の精神と仏教の布教

——たしかに仏教が普遍宗教と呼ばれるに至ったのは、仏教にそれだけの思想的な普遍性があつたからであります。現実にはそれを支えてきたのは艱難辛苦を乗り越えて布教に従事した仏教僧の存在があつたことを忘れてはならないと思います。その点で、先生に今お話しいただいた大乘仏教の慈悲の精神に基づく利他の強調と熱心な布教ですね、これが大きな役割を果たしたのではないかと思われませんか……。

中村 そう思いますね。一身を犠牲にして、教を実現することに努める。人々にも説くという、これが、こ

の精神力が、やっぱり大乘仏教を盛んならしめた原動力でしょうね。

教えを伝えるというのは、今日考えるようなものではなくて、命がけの大変なことだと思いますね。あのシルクロードというのは、人々はロマンティックに考えていますけれども、砂漠でしょう。あそこを生きて旅ができるかどうか分らない。一遍出かけたらもう帰れないかもしれない。本当に運のいい人だけが帰れたわけですから。決死の覚悟があったわけですね。

それから海を渡って中国大陸へ行った人だっていますよね、当時は船の難破の割合が多かったわけです。船が沈没する。だから生きて帰れないかもしれない。その覚悟をもって出かけていったわけですね。これはもう、たいした精神力だと思います。

それは当時の商人のなかには、利益を得たいためにラクダの背に珍しい商品や貴重品、宝石などを乗せて帰った人もいたでしょうけれども、しかし、仏教の修行者はそうじゃなかったんです。たとえ教えを伝えても、自分にはなんの得もないわけです。なんの利益もない。けれ



中村 元氏（右）にインタビューをする菅野氏

どもそれをあえてした。それは精神力だと思いますね。

——原始仏教に即してお伺いしました人間の平等視という問題に関しましても、原始仏教の立場では出家者と在家者との宗教的理想にレベル差を認めている。すなわち出家者は三界六道を超えて涅槃に入ることができる。

一方、在家者は現世においては天界、神々の世界に生まれるという生天思想ですね。そのような、レベル差というものを設定していたと思われますが、大乘仏教においては要するに在家の信仰者も究極の宗教的理想、すなわち成仏が可能なのだというような理論的な展開があったと思われませんが、その点も、仏教の普遍性という点で見落としてはならないと思われませんが、いかがでしょうか。

中村 そう思います。伝統的・保守的仏教、いわゆる小乗仏教ではですね、修行僧もいたし、在家の信者もいたわけですが、ただ、達しうる境地が違っているとされていた

わけなんです。

片一方はとにかく修行すればやがて涅槃に入る、ニルヴァーナに入れる。ところが在家の者は、せいぜい天の世界に生まれることができると。要するに落差があったわけですね。格付けが違っていたわけです。

ところが大乘仏教になりますと、そういう觀念も生きてはいましたけれども、それと同時にですね、我も人なり彼も人なりという自覚をもって、人々とともに苦しみ、人々とともに生きようという心構えがはっきりしてきたと思うんですね。で、むずかしい論議はやめまして、一番はつきりした例はですね、南アジアのお坊さんに会った時には、在家の人間、私なんかは合掌するんです。そうするとお坊さん、ツーンとしてるんです（笑い）。あれは礼を返しちゃいけないですよ。

それから何かその御馳走でも差し上げた時「ありがとう」といってはいけないんです。「ありがとう」なんていうと、そこに執着が残るから、だから黙って、ツーンともらうわけです（笑い）。

それが当たり前なんです。ところがですね、大乘仏教

になると違う。例えばダライ・ラマさんに向かって私が合掌しますね、そうするとダライ・ラマさんもやっぱり合掌を返すわけなんです。

大乘仏教を受けてる日本の仏教ではですね、どんな高僧でもですね、やっぱりこっちが合掌したりお辞儀すれば、向こうも受け答えをしますよ、日本ではね。

それは一切衆生悉有仏性で、だれにだって仏性がある、その点では平等だという、そういう自覚があるからですね。

で、今後のことを考えますとですね、やっぱり南アジアの仏教の在り方というのは、修行者の場合、傲慢だという印象を与えるんですね。こっちがお辞儀してもツーンとしてるわけですから……。

それはいかんということを多少は南アジアのお坊さんを感じたらしいんです。だから、彼らが我らに対して礼を返す方法はですね、合掌はしないんです。お辞儀もしないんです。けれども、握手はいいですよ。仏典に禁止されてないから。

だから、こっちが合掌しますと、向こうは手を出して

んだから。

——その点における法華經の普遍性についてはいかがでしょうか。

中村 これはもう、経王ですね。お経の中の王者といつてよい。これはもう大変なものです。ですから非常に捉えにくいですね。けれど、まさにそこに盛られている教えというものを我々が生かそうと思えばいいんじゃないですかね。

しかし、なかなか西洋の小説を読むようなわけにはいかないのですよ。中に書いてある法理、教えが途方もなく巨大なものですからね。

また、どこで作られたのかも、本当に不思議ですね。ガンダーラ地方で作られたのではないか、といわれていますが、定かではないですね。本当に巨大な教えですね。華嚴經になると、コートンあたりで最終的に手を入れたことがいわれています。それは、非常にコートンで読まれていた、とありますからわかるんですが、これが

つかむんですね、私の手を。あるいは握手する。そういう一つの解決法ですね。つまり現代の世界における南方仏教の新しい表示の仕方です。

——それは最近のことですか。

中村 そうです。最近、私があちこちでえらいお坊さんに会った時に、それを感じるんです。けれども、まあ一般としてはですね、やっぱり礼を返すというほうが一切衆生悉有仏性の精神を具現してるので、より普遍性をもっている。だから大乘仏教のほうが人々に受け入れられやすいんじゃないでしょうかね。

法華經一乗思想の普遍性について

——今、『涅槃經』の一切衆生悉有仏性というお話を伺ったのですが、『法華經』の一乗思想も人間の平等視という点では重要なものと思われませんが……。

中村 そうだと思いますね。いかなる者でも救われる

法華經の場合、わからないんですね。

ただ、法華經には造塔ということがたくさん出てきます。ストゥーパですね。ストゥーパがたくさん残るほど作られたのは、ガンダーラにあったクシャン朝のヴァーデーヴァ王の時代なんですね。ですから何かその時代と関係があると思ってるんです。

それともう一つ。法華經には「長者窮子のたとえ」の中にも出てきますが、商人が王様を呼びつけるという話が出てきますが、これは商人の力が大変に大きくなっていった、ということを示しています。そういう時代背景のもとに作られたのではないか、ということがいえると思います。

戒律の柔軟な適用

——先ほどの先生のお話にもありましたが、仏教が外国といえますか、異文化に入っていく場合、戒律の適用の柔軟性ということが大きな問題になると思いますが、それは、大乘仏教の慈悲と何かしら関係があるのでしょうか。

中村 戒律というのはなぜ決められたかという、やっぱり修行者が修行を続けるためにはこういうことに注意をしなければいけない、ああいうことに気をつけろという、その精神で作られたわけです。

ところが後になりますとですね、その箇条にだけとられるようになった。そこで融通がきかなくなるんですね。一番いい例はですね、廬山の慧遠の亡くなる時の話があるでしょう。なんでもその、命、旦夕に迫っていたので、それではと、「蜜を」と……。

——蜜の前に米汁じゃなかったかと……。

中村 米汁でしたか？

——弟子が米汁を勧めたけれども、戒律に背くというので断られ、そこで蜜を……。

中村 そうそう。氷と蜜とを和して飲ませようとした

んですね。

元気を付けるようなものを出したわけですね。弟子がどうかといったら、慧遠和尚は、これは戒律に背かないかどうか調べるというわけで、それでみんなが戒律の本をもう一度あたって調べているあいだに亡くなった。

これをですね、日本の富永伸基という人が『出定後語』を書いた人ですが、「ああ、また陋^{ろう}なるかな」と書いた。あんまり窮屈すぎるんですね。その点で大乘仏教のほうに融通性があるわけです。

ことに伝教大師の戒律観というものは、従来の小乗の戒律にとらわれないんですよ。では何に基づくかという、慈悲の精神に合致していればいいわけですね。

で、慈悲の精神に合致してるかどうかというのは、これは時代とともに変わると思うんですね。

ことに、このごろのようになりますと、平和の問題とか、環境の問題とかですね、それから核反対とか、いろいろなことをいわなければならぬ。これはやっぱり戒律の本にないから、やらなくていいんだというとはいえないんで、今の世の中で大事なことでしたら、慈悲の

精神に基づいて、なすべきことはなさなきゃいけない。

大乘仏教のほうに、柔軟性をもつて。時代を超えて生きるわけですよ。

そして、南アジアのお坊さんは勤労を一切しないわけですよ。だから、お寺にいても何もしないんです。

托鉢して帰ってきます。その御飯をいただきます。あと、お寺の雑務は寺男がやるわけです。例えば一つのタイの大きな僧院に五百人お坊さんがいると、そうすると、それに近い寺男がいるんです。寺男が一切、雑務をするわけです。

ところが中国に來ますとですね、ことに禪でしような、転換期をなしたものは、これは作務を重んじてね。一日なさざれば一日食らわずという……。

それによって仏教が生きて、日本にも入ってきたわけですよ。日本の仏教はむしろ勤労の精神を説くわけです。

どっちがいいかという問題になるけれども、やっぱり世の中で苦しみ悩んでいる人がいるなら、身を粉にしても人々のために働くということが必要になってくるんじゃないですか。

それをただ、古い戒律にとらわれているというのだと、新しい社会に対して適応性がない。だから、大乘仏教のほうが広まったんだと思います。

仏教の根本は慈悲の思想

——では次の問題に移らせていただきます。普遍性をもった仏教は中国、日本、東南アジアなどに広く伝播したわけですが、異文化に入ることによって、当然、仏教はある種の変容を受けたと思われしますが、そのなかで仏教の本質はどのようにして確保されているのか。言い換えれば、かなり異なるとみえる各地域の仏教がそれでもなおかつ仏教と呼ぶことができるのは何ゆえか。中村先生のお考えはいかがでしょう。

中村 適応性のある仏教が大体、広く広まったわけですよ。それは、人々のためを思うという根本精神がそこにあるわけですね。その立場に基づいて摂取して差し支えないものはどんどん取り入れる。適応してよろしいと思うものは適応したわけです。で、今日に至ったわけですよ。

が、現在の世の中ですと、南アジアのお坊さんの守っておられる戒律というのは、必ずしもそのとおり実行できないものがあるんですね。あるいは実行するのに不便なものがある。

その一つは、お金を手にしちゃいかんというんですね。十事（仏滅百年頃、ヴェーサーリの比丘たちが実行していた金銀を受け取ってもよいなどの十項目（戒律に違反すると裁定された）の論争の時に起きたんだけど、お金を手にしちゃいかんというのは、金銭にとらわれちゃいかんということで、これはこれで結構な精神ですけども、面倒なことになりますよ。

それじゃバスに乗れないですよ。だって財布持っていないだから。その場合に、解決法は、沙弥、小僧さんを連れていくわけです。小僧さんはまだ戒律を完全に受けてないから、お金を持っていっていいわけです。で、小僧さんが払うわけです。

けれども、小僧さんがいなかったらどうなるのか。そうすると、南アジアのお坊さんでもですね、日本へくるとですね、やっぱり財布は持ってますよ、自分で……。

も「固なるかな陋なるかな」と出ている。固陋だっているんですね。

実際問題としてできるかというと、日本のように女がですね、そんなブルカなんかやってないですよ、もう（笑い）。

南アジアではどうしてるんだっていいですよとね、「守れるか」っていうと「守れる」っていうんですね。バスの中にですね、人がギュウギュウ詰めになっている。腰かけると、隣に女の人が座っていることだってありうるわけですね。そうすると女人に触れないという戒律を守れるか、と。そうするとこれはね、南アジアでは「守れる」っていうんですよ。なぜかという、バスに乗ってお坊さんがくるとですね、女の人はサッと立つんです。触れないんです。

——周りが気を使う……。

中村 周りが気を使うわけです。けど、日本じゃそこまでやってくれないから、だからやっぱり、あまり窮屈

それからね、三衣一鉢というでしょう。これは日本のような寒い所じゃ守れませんか。すでに中国では、その慣習は捨てられたんですね。

それから午前中しか食べちゃいかんという、これは南アジアだから守れるんですよ。そして午後は何も食いたんすから。しかし、寒い国ではですね、やっぱり午前中だけの食事じゃ健康がもたない。そこで薬石をとることにしている。夕方の御飯は薬なんです。あれは齋ではないんですね。薬として御飯をいただくんだ、と。やっぱりある程度とらざるをえないんですね。

それから、女人を遠ざけるということですね。これは南アジアのお坊さんは固く、少なくとも表面的には固く守ってるわけですが、さて、イスラム世界みたいに、女の人がブルカをかぶっているような所ではないですよ。けど、素顔を現しているような所ではどうか。そうすると澄観はですね、「目、女人を視す」といったそうです。それは僕は『出定後語』に出ているのを読んだんです。

澄観はたくさん本を書いているんで、どこに出てるのか知らないけれども、『出定後語』には出ている。これ

なことはないんじゃないかと思うんですね。非常に無理なんですよ。それから、お坊さんの戒律というと、肉食妻帯ってことを日本ではいいますね、持律堅固などと……。

肉食せずってことはですね、あれは大乗仏教になってからやかましく言ったんですね。もとは、自分が殺さなければ、もらったものの中に肉が混じっていてもかまわなかったんですね。

大乘になってから、慈悲の精神でですね……。だって、自分のために殺さなかったということが、どこで判定できるかということで、同罪じゃないかという、そういう議論が成り立つわけです。だから大乗仏教では俗人の人でも肉食しない人がおります。それから、南アジアでもですね、ヴェジタリアンのお坊さんがいますよ。僕は何人も会った。

スリランカのナーラダ長老もそうでした。ナーラダというのは原始仏教の本なんかよく書いている人です。それから俗人でもそういう人がいるんです。これは戒律の問題というよりも精神の問題だと思っんです。

それから、僧侶の結婚ということは、これは一般には行われていないで、公に認められているのはネパールと日本ですね。なぜ認められるようになったかというところ、その訳があるでしょうが、私はやっぱり現実的に活動しなきゃいけない国だからじゃないかと。ネパールなんかは段々畑の国でしょう。働かなきゃいけない。やっぱり労働力が多いほうがいいわけですよ。乞食^{こじき}なんてできないです。日本だつてとにかく国が発展しようとした明治維新の時にですね、あの戒律を捨てちゃったわけでしょう。

将来はですね、聖職者の独身ということが必要となるかどうか、これはむずかしい問題です。独身で家族がいなければ、執着がない。つまり財産なんかいらないうわけだから。だから、活動に打ち込むことができる。

しかし、こつそり夫人を囲ってるのに、表だけ独身だつていう場合が非常に多いんですよ。これはウソ、偽りということになりますね。やっぱりよくないと思うんです。

それから今、カトリックのほうでも同じ問題が起きて

思いますね、状況によって……。フレキシブルだから、新しい情勢に応じて実践を方向づけるということが必要になってくる。精神は一つなんですね。

やはり慈悲の精神というのが行き渡るべきだと思うんです。それを具体的にどう実現するかということは相当……。

——今、かなり具体的に肉食妻帯、あるいはその他の戒律についての各地域別の具体的な状況を御紹介いただいたわけですが、そのなかで仏教が仏教である中心といえますか、今、最後に慈悲の精神ということをお話いただきましたが、その点はいかがなものでしょうか。

中村 私はい、こういうふうに考えているんです。仏教というものを護持する必要はない、と。むしろ慈悲の精神というものを護持する。そうすると、その立場に立ちますと、ほかの宗教との協力ということもいえると思うんです。

るでしょう。聖職者の独身制をやめようという……。結婚してかまわないということです。それはいかんと、法皇様はまだおっしゃってる。だから、表向きは守られてるんです。けれども、これがいつまでも守られるかどうか、それから守る必要があるかどうかということですね。珍しい例ですが、日本でもですね、結婚はしてるけど、菜食は固く守ってるという、そういうお坊さんを私は知ってます。そういう形もありうるわけなんですね。ことに緑の運動というのが起きてくるでしょう。緑の運動は動物愛護と結びついてるんですね。動物実験反対。実験に殺しちゃいかんとかね……。ただ、相当変わってくると思いますね。

実はヴェジタリアンの運動というのは、欧米でもこのごろですね、伝統に反逆するような人のなかで起きてるわけです。というのは、伝統に対する批判ですね。

で、どういうことになるか、将来、文明が発展してですね、生き物を殺さないでも蛋白質はとれるし、いろいろな物品もですね、動物を殺さないでいいということになれば、また動物愛護ということが可能になってくると

ほかの宗教との対話とか協力ということがよくいわれているけれども、違ったものをごっちゃにしたら、何も出てこないわけです。そこでやっぱり選別する必要があるとくる。

その選別の基準は何かというと、人々に対しては、思いやりをもち、温かい気持ちで、慈悲の精神をもつ、と。そこから平和運動なんっていうことも出てくるわけですね。世界平和なんてことは、いろんな宗教の人がいうし、いろんな民族の人がいうけれども、これは宗教の差を超えてですね、民族の差を超えて、やっぱり何かの形で協力して実現すべきことじゃないですかね。

輪廻思想は普遍性をもつか

——では、次の問題に移らせていただきます。

仏教の普遍性を考えるうえで、当時のインド思想からブッダが摂取した輪廻の思想は重要な問題と思われる。過去の仏教史を回顧しますと、仏教がインドから中国に伝来した時、中国人が最も衝撃を受けたのは三世輪廻の教えだったといわれており、それをめぐつ

て四世紀から六世紀にかけて盛んに論争が行われました。

もちろん仏教徒は三世輪廻を主張することに熱心だったわけですが、その後の中国仏教をみると、本来現世主義の強い中国において、この三世輪廻の教えはあまり定着しなかったのではないかと思います。

また現代においても、欧米社会において、おそらく最も受け入れがたい仏教の思想は輪廻の思想ではないでしょうか。もっとも、最近では臨死体験、近似死体験の研究が少しは状況を変えているのかもしれませんが。

中村先生はブッダの輪廻観をどのようにとらえていらっしゃるのですか。また、欧米社会と輪廻思想との関係、輪廻思想の未来について、どのようにお考えでしょうか。

中村 インド人は非常に輪廻ということを考えましたけれど、これは東アジアで定着しなかったといわれる。そのとおりだと思いますね。それはたしかに、影響は与

えています。「山鳥のほろほろとなく声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」というような時は、明らかに輪廻思想というようなものが生きているわけです。

けれども一般的にですね、すでにシナ仏教というか、シナの禅宗ではあまり輪廻は定着していない。

で、偉いお坊さんが亡くなる時に、生きながら黄泉よみに落ちるというようなことをいうでしょう。黄泉の国に落ちる、と。これは輪廻じゃないんですね。あるいは救われてどこか浄土へ行くという考えでもないわけです。

日本の禅宗のお坊さんだって、そういうことを考えておられる。だから、定着しなかったと。それから輪廻思想はインドにあつたという。輪廻思想は何かというと、これははっきりしないんです。サンサーラというでしょう、サンサーラというのは今の世の中のことをインドの言葉ではいうんですよ。

例えば「世界平和」の「世界」ですね、サンサーラという言葉をよく使っていますよ。現代のインドの言葉ですね。その用法はどこまでさかのぼれるか知りませんが、昔の人だって、迷いの世界のことをサンサーラとい

っていたと思うんですね。

で、その迷っている姿を示すために靈魂がぐるぐる展開して生まれ変わると考えたわけでしょう。それと無私の思想とどうなるかということを学者は論議するんですが、一般に信ぜられていた思想だからブッダは使ったと思うんです。

じゃ、真実はどうか、釈尊は本当に信じていたのかどうかということですがね、輪廻という場合に、何か靈魂という物体があつてぐるぐる変わると、そう思った人もいるでしょうけれども、今の我々としては輪廻を必ずしもそのように考えることは必要ない。

むしろ、このように考えるべきではないかと思うんですが、我々が生まれてきたのは、これはなぜか分からないうわけです。いろんな因縁といいますか、原因、条件とか影響が加わって、その結果として生まれてきているわけでしょう。

今生きているのも、そういう力が働いているわけです。それで、やがて消える時には、その加わっている力が若干、消え去る。だから人間の存在が解体されるわけです。

ちょうど柴を集めてくると、家になる。庵になる。庵

を解くと、もとの柴になる。そういう理解の仕方が日本で行われてましたが、それじゃないかと思うんです。

いろんな条件がバラバラになっちゃうと、我々は消えてしまふわけです。

で、その条件がどうなるかというと、決して消えるわけじゃないですね。また何か作り出すでしょう。それが哲学的な意味における輪廻になるわけですね。

そう思うと、我々の存在というのは宇宙と一体になつていて、ただ、宇宙と一体になつていてという在り方が違うというだけです。我々個人の力などというものは非常に無力なものです。

そう考えますと、西洋の思想家が受け入れにくいということはないということですね。

すでに輪廻の思想というのはギリシャにあるわけですね。ピタゴラスやオルフェウス教、あれは輪廻の考えをもっている。ピタゴラスは犬がほえたのを聞いた時、「ああ、あれは私の友人がほえてるんだ」と。そういうことをいう。それから、生まれ変わるといふ思想はプラトン

にもあつたはずですよ。オルフェウス教の影響で。

——『パイドン』に出ていますね。

中村 ヘレニズム時代のキリスト教の若干の教父達にもある。これはよく覚えておりませんが……。

それから中世になると、異端者のなかに輪廻思想があるんですよ。カタリの徒というんですね。これはキリスト教の異端ですがね、非常に仏教的なんですよ。

それから近世になるとですね、輪廻はあまり説かないかもしれないけれども、来世をしきりに説いたのはドイツの哲学者フエヒナーですね。それから意志の力に基づく輪廻というか生まれ変わりを説いたのがショーペンハウワーですね。そういう思想がある。

カイゼルリンクなんかの『哲学者の旅』にも出てますし……。生まれ変わるといふ思想は、西洋でもひよいひよい出てくる。それから自分の個体がですね、全宇宙と関係をもっているという思想は、ライプニッツなんですね。ただライプニッツは個体を別々のものと考えたよう

と同じく普遍宗教と呼ばれますが、普遍性の質を考えた場合、その共通性と相違性を中村先生はどのようにお考えでしょうか。

中村 共通性という点ではですね、すべての人が平等である、少なくとも絶対的なもののまえでは平等であると考えます。その立場に立ちますと、民族の差、階級の差を超越してしまうわけですね。

しかし、実際問題として、教団を作りますと、教団のエゴイズムというものが出てくるわけです。そうすると争うことになる。で、教団のエゴイズムというものがキリスト教や、それからイスラム教の場合は強いということです。

仏教も、ないとはいえないけれど、それは弱いですね。その違いはどうかというと、ほかの世界宗教は武力にものをいわせ、暴力によって教えを広めようとする。ところが仏教はそれがありません。だから、宣教、伝道ということでは、仏教のほうが弱いわけです。けれども、そのために人に迷惑をかけるということはないわけです。

です。

しかし、これは予定調和のようなもので、お互いに宇宙のものが連絡があるという考え方です。これは仏教的ですね。仏教の円融思想、とくに華嚴的な考えと同じなんですね。

——輪廻思想というのは仏教独自のものではなく、インドに広く見られましたね。

中村 仏教独自じゃないです。インド一般に行われたもので、すでにウパニシャッドのなかに、生まれ変わるという思想があるわけですよ。ジャイナ教でも説きますしね。アー जीविकाでも説いていた。で、仏教でもそれに同調していた。それによって一般の民衆が仏教の教えを受け取りやすくなっていたということがいえると思います。

他宗教との共通性と相違性

——次にですね、キリスト教、イスラム教も、仏教

ね。

宗教の名において人を殺すなどということは仏教じゃないわけですから。ほかの宗教では、それを平気でやっているわけですから。こういう大きな違いがあると思います。

——唯一絶対神を立てるかどうかというのが、仏教と他のキリスト教、イスラム教と大きく違うと思いますが、その点は今後の世界宗教の在り方を考えた場合ですね、いかがなものでしょうか。

中村 唯一絶対の神ということを申しますが、その唯一絶対の神という考え自体が相対的なものなんです。唯一絶対のものがあるでしょう、そうでないものもあるでしょう、同じ次元において考えているんですから。だから、そういうふうには絶対ではないわけです。唯一絶対ということによって絶対を捨て去っているわけです。だから一神教というのは、とかく争いを起こしがちになる。ところが仏教はそれをいわないわけですね。唯一絶対

の神などというものを立ててその教義でしるということがない。だから、教義によってしるということがないようにしてはならない。そうでなければ、世界平和はいつまでたってもこないと思います。

——普遍宗教と呼ばれる宗教が、現に複数存在し、かつそれぞれが自己の宗教の普遍性を主張する場合、それらの相互関係は次の三種のあり方が想定されます。

第一にそれぞれがあくまで排他的な絶対性を主張する立場、いわゆるファンダメンタリズム、原理主義の立場ですね。

第二に、あるがままの共存の立場。第三にそれぞれが自己否定の契機をもって、より高次の統合を追求する立場。個人と教団とは、現実には、取る立場は大いに異なることが予想されます。というのは、例えば既成の教団が第三の立場を実際に取ることは、可能性は大変少ないと、私には思われるのです。しかし、一方では、既成の教団とはいえ、時代とともに変化する

部分が全くないとはいえません。
この問題について、中村先生はどのようにお考えでしょうか。

中村 ファンダメンタリズムというのはまだ残ってますね、どこかに。けれどもね、だんだん消えていくと思うんですよ。その勢力がだんだん弱まっていく。やがて消えるでしょうね。次にいわれた、あるがままに、そのまま残すか。まあ、当分残るでしょうね。大宗教がすぐに消えるということはない、と。

けれども将来の問題として、普遍宗教とか世界宗教といったって、二千年か二千五百年の歴史しかないわけでしょう。人類の歴史というのは何万年か知りませんが、この先、人類もどれだけ続くか分からない。仮に続くものとすればですね、二千五百年の歴史なんて短いものです。

だから、今の既成宗教なんていうのもまた、ほうっておいでも解体されると思います。

その代わり、新たなものが出てくる可能性はある。そ

の新たに出てきたものがまた集団的なエゴイズムを發揮するということは、これは考えられるんですよ。だから、それに対しては警戒すべきだと思うんですね。

——面白い例は共産主義だと思うんですね。共産主義というのは、世の中を救う福音みたいに私の学生時代に名乗っていたんです。ところが現実には現れた共産主義というのは、恐ろしくエゴイステイックな、教条主義的なものでしょ。そこで批判が行われていますね。

——仮に第三の高次の統合を追求する立場に立った場合、宗教間の相互理解が何よりも重要だと思われるますが、仏教の立場から西欧と対話する場合ですね、その対話のあり方について、我々がとくに注意すべき点がありましたら、お教えください。

中村 私はね、とくに注意しなくてもですね、相互に話し合えば、話し合った人が何か感ずることがあると思うんです。それで自己変革ができると思う。で、その先、また新しいものが出てくるでしょうね。

これを単に政治的な意図をもってですね、二つとか三つとか、それをチャンポンにしようと思ったって、そこからは何も出てこない。むしろ今までの宗教とか哲学体系とか、たくさんありますが、それを考慮しながら、自分の新しい道をめいめいの人が求める、と。めいめいの人が求めた結果、やっぱり共通のものがあれば、共通項が出てくると思うんです。

教団とか仲間とかソサエティーを作ることとか……。しごく当然のことですね。作って、それからまた何かのことで解体することだってありうる。あるいは解体しないで続くかもしれない。これはおのずから理由のあることでして、自然法爾の理にしたがえばいいと思っております。

——先ほど先生は、ファンダメンタリズムが消えつつあるというお話をなさいましたが、世界的にエキュメニカル運動、諸宗教一致の運動が盛んでありますが、他方ではファンダメンタリズム、原理主義の台頭ということも最近多いと聞いているのですが……。

中村 これはむずかしいですがねえ……。キリスト教だって、ファンダメンタリズムがある。例えばアメリカではですね、新しく出た聖書の訳なんていうのは、あれは悪魔の書だといってですね、教会に山のように積みましてね、そしてファンダメンタリストがそこに集まって火をつけてですね、喝采したと。そういう例もあります。けれども、そういう人がいくらいてもですね、一般の人はず、イエール大学で出したような、ああいう聖書のほうが学問的に正しいとみるでしょう。だんだんそっちのほうへ行く。それから死海文書なんていうのが見つかりますね、そうすると、それを考慮した研究なんていうのは否定できないわけです。

仏教の場合だって同じことで、まあ、あまり写本も見つからないけれども、でも何か出てですね、それが人々の聖典観に変革を与えるということはありうると思うんです。イスラムのほうは私は、あまりよく知りませんがね、今までのイスラムはコチコチだったと思うんです、正直なところ……。

けれど新しいイスラムの運動が起きてね、たとえば、これは亡くなった人ですけれどもアビド・フセインという学者が、イスラム・アンド・モダンエイジ・ソサエティーという会を作ったんですが、世界宗教の本を出しているんですよ、次々と。

イスラムの教えは愛の宗教であるということを彼は言うんですよ。コーランなんかとだいぶ違うんだけど、イスラムだっていろんな面があるでしょうから、コーランの宗教じゃなくて、愛の宗教というものを実現しよう、と。そういう動きが起きてくると、ほかの宗教との対話ができるわけですよ。

だから、ファンダメンタリストは一時、盛んなようにみえても、結局は衰えると思います。ただ、我々の注意すべきは新しい運動が盛んになってきた時に、新しいファンダメンタリストの運動が起きないように、警戒する必要があるでしょうね。

仏教の新しい歩み

——仏教が普遍宗教という以上、世界の人々の精神

の支えとならなければならぬと思いますが、現実の国際政治のなかでは国家の対立、民族紛争などの諸問題がたくさんあるわけでありす。

一般に仏教には社会哲学が欠けているという指摘がなされることがありますが、そのような現実政治の問題に対して仏教は何か貢献することができるのでしょうか。

中村 今までですね、仏教はあまり政治的な活動をしなかったんです。政治的な力に頼ることをきらっていた。だから、今日のようにすべてが組織された社会になると、活動力が弱いわけです。これは欠点だと思います。しかし、武力に頼らなかつた、暴力によらなかつたということ、また大きな長所であるべきです。

そこで、新たな長所を生かしてですね、新しい情勢に対応するための政治哲学が必要でしょうね。

で、今までそういう政治哲学が作られていなかった。これを今後の人に期待するわけです。

ただ、いきなりですね、今の仏教学から新しい政治哲

学が出てくるとは思いません。まずですね、仏教の言葉なり、仏典の言葉を普遍的な言葉に翻訳することからですね。

日本人だったら、日本語に直さなきゃいかん。仏典の言葉というのは、あれは日本語じゃないですよ。だれも分らない。

だからやっぱり、日本人の言葉に直す。それからよその国でしたらですね、よその国の言葉に直して、普遍的な理解を作っていく。そのうえで社会思想、社会倫理、政治哲学を作り上げることでしょうね。この点では遅れているとは思いますがね。しかし、ますます努力する必要があると思います。

——今日はこのテーマに関連しまして、貴重なご本をご用意いただいています、何か……。

中村 これはですね、ちょっとご参考になるかと思つて持ってきたんですがね、オリヴァーという人の書いた『ブディズム・イン・ブリテン』というんですね。イギ

リスの仏教団体パーリテキスト・ソサエティーのこととか、それからイギリスの仏教学者のことをずっと紹介している。

それからイギリスにブディスト・ソサエティーというのがありますがね、そのこととそれから南からテラ・ヴァーダが入ってきたということですね。

それから、チベットからですね、チベット仏教の多彩なる曼荼羅が奉ぜられるようになった。新たに仏教教団の友というのが作られるようになった、と。

それから、禅も入ってきた。……そういうようなことを、ずっとこの人が論じているんです。

——なかなか珍しいものですね。

中村 珍しいものです。私、イギリスへ行った時、買ってきたんです。日本にはないし、丸善なんかこんなものは取り次ぎをしませんから（笑い）。

それからこれはですね、鷹谷俊之という方が『東西仏教学者伝』というのを作られてる。仏教、おもに学者で

ている。それから中国人だったら、中国仏教を奉じているわけですね。移民と密接に関係して、発展し根づいている。

それから、第三は大乗仏教ですが、ことにですね、チベットの難民のラマ教徒達を中心にして、案外これが、もてはやされているんですね。難民の教えにアメリカ人が耳を傾けるかしらと、私は疑問に思っていたんですが、しかし、結構、信者が増えているんですね。

それから、それとは別に知識としてですね、受け取るということは非常にあります。仏典の翻訳はほとんど出てますからね。このごろアメリカで作られてる禅センターなんていうのは、出版をしていますからね。

そうすると、いろんな民族の血を受けているアメリカ人のなかに入っているわけですね。

キリスト教の教会の勢力は、これは簡単には衰えないけれども、信者のなかでもですね、「仏教の教えはなかなかいいことを言っている」と思って、それを体得しようと思っている人はいろいろございます。

これに対してヨーロッパはなんといっても、伝統の力

ですがね、南条文雄などいろんな人の伝記を個人別に書いています。これ、わりあい便利なんですよ。私、なんかの時にはよく使いますが……。

欧米社会における仏教の現状

——最後に、欧米社会における仏教の現在の状況といますか、それをお教えいただければありがたいのですが……。

中村 アメリカではですね、わりあい伝統の力の弱い国でしょう。だから、いいものだと思います、みんな飛びつくわけです。だから、あちこちで仏教の運動が起きてるわけです。大きくはないですけどね。どう分類しますか……。

一つはですね、南方の仏教の感化ですね。南方のお坊さんがくることもあるけれども、また、仏典を読んでその思想に共鳴するというような人がいる。

それから第二のグループはですね、移民を中心にした仏教です。つまり、日本人だったら、日本の仏教を奉じ

が強いですからね、簡単にはいきませんが、しかし、イギリスではブディスト・ソサエティーというのがロンドンにありましてね、感化を受けた人々がグループを作っている。

ただ、やっぱりイギリス風でして、日本風の坐禅はできないんです。坐蒲は使わないで、椅子に腰かけての瞑想ですね。それから、フランスにはブッダ友の会というのがありますがね、これはたいした社会的勢力はないと思うんです。

ただ弟子丸泰仙さんの禅がですね、急に広がった。これがどの程度のものかですね、私は自分であたっていませんからちょっと知りませんが……。

それからドイツではですね、ベルリンにダールケというお医者さんの作った大きな仏教寺院があるんですけれども、高い小山があるんですね、それを全部お寺にしちゃったんです。ダールケというお医者さんは独身でね、子供がいらないわけです。資産がある。その資産をもって作っちゃったんです。これが一種の観光名所になっているわけです。そうすると、ベルリンにはアメリカ軍の駐屯

兵士達がいるわけです。その家族もいる。それらが皆、やってくるわけです。

最初は好奇心からやってくるんでしょうが、けれどもそこへきてですね、やっぱり話を聞いたり、それから書物を買ってまさら、ダンマパダの翻訳なんか……。おのずから感化が及ぶわけです。訪ねてくる人が非常に多いんですね。まあベルリンの名所ですよ。

ほかには、それほど大きなものはないと思うけれども、たとえばハンブルグにはラマ僧を中心にしたメディテーションのグループがありますしね。少なくともドイツ人が関心をもっていることは事実です。

で、去年の五月にですね、ニーダー・ザクセン州の政府が主催者になって、精神と自然ということについての国際会議を開いたんです。つまり、自然が破壊されてますしね、文明がこのままでいいかどうかと……。

その際に、付属の行事として瞑想があった。キリスト教の瞑想、それからチベット僧による瞑想、それから日本の坐禅。

それにやっぱりドイツ人が加わるんですね。物珍しさ

からかもしれないけれども……。やっぱりドイツ人がやってくるということです。日本の坐禅には百人以上の人が集まった。

求める気持ちはあるんですね。これがどう発展するか分かりませんがね。実情はそんなものです。ドイツでも新宗教の対話ということが盛んに行われてますね。ドイツ、それからオーストリアでも。従来なかったことです。

——最後に、何か付け加えていただくことがございましたら……。

中村 私が申し上げたことはですね、今までの経験に基づいて気づいたことを申し上げただけです……。これから新しい未来が展開されていく。その新しい未来というのは若い方々のものなんです。だから、新しい時代に向かって歩みを進めていただきたい。それをお願いいたします。

——本日は貴重なご意見をたくさん伺うことができて、まことにありがとうございます。

(なかむらはじめ・東方学院院长)

(かんのひろし・創価大学専任講師)